OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	屏風歌歌人としての貫之 ： 「草木」をめぐって
Author(s)	田島, 智子
Citation	詞林. 1991, 9, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67298
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

屏風歌歌人としての貫之
―「草木」をめぐって―

田島　智子

はじめに

古今集を撰進した貫之は、歌人としての名声を不動のものとし、当時流行しつつあった屏風歌を大量に依頼されるようになる。古今集以後の貫之は、屏風歌歌人として生きたと言っても、過言ではない。幸いそれらのほとんどは、現存の貫之集に年代順に収載されているので、古今集以後の貫之の詠法はかなり詳しく知ることができる。それらについての評価は、賛否両論である。否定的見解をとる立場はその主な根拠として、貫之がよく似た表現を繰返し用いていることを挙げている。確かに、斬新な表現を追求していた若かりし頃に較べると、屏風歌歌人としての貫之は、類型的な表現によりかかっている印象をぬぐいきれない。

しかし、論者は古今集以後の貫之にも、和歌表現に対する、変わらぬ意欲と工夫を看取できると考えている。以前その一例として、「ももとせ」という、本来慶賀的でなかった言葉の、慶賀的場面への導入を指摘したことがある(注1)。それに続いて、今回は「草木」という表現に対する、貫之の独自な試みを指摘したいと思う。(「草も木も」と分離して、用いられることもよくあるのだが、本稿では併せて「草木」としておく。なお「木草」という形では、和歌には現われない。)

一　衰える「草木」の屏風歌

貫之は、「草木」に対して、普通以上の興味を示していたと考えられる。この言葉が、和歌にそれほど用例がなく、物語中の歌を含めても、三代集全体で四十九首しかないにもかかわらず、貫之は十四首も詠んでいる。しかも、他の歌人は屏風歌にはほとんど詠まないのに、貫之にかぎって屏風歌に多く用いて

いる。貫之の十四首のうち、十二首までがそうである。貫之以外の屏風歌では、中務にたった一首見出せるにすぎない。

貫之が特に屏風歌に「草木」を詠んだのは、なぜだったのだろうか。貫之の次の屏風歌から、検討したい。

> 男女の家にいたりてとぶらひたる
> 草も木もありとはみれど吹く風に君が年月いかがとぞ思ふ
> 返しをんな
> さくら花かつちりながらとし月は我身にのみぞつもるべらなる　（貫之集　四三一　四三二　天慶三年屏風）

この贈答歌は、一読しただけでは意味がとりにくい。特に男の歌の、上句「草も木もあり」と、下句「君が年月いかが」とが、どう関連するのか判然としない。この謎掛けめいた歌を詠み解くには、次のような「草木」の詠み方を参考にするとよい。古今集秋部に、

これさだのみこの家の歌合のうた
吹くからに秋の草木のしをるればむべ山かぜをあらしといふらむ　（古今集秋下　二四九　文屋康秀）
草も木も色かはれどもわたつうみの浪の花にぞ秋なかりける　（同二五〇　同）

と、「草木」の詠み込まれた歌があるのだが、それらは「萎る」「色変わる」ものとして詠まれている。貫之の屏風歌の「草木」も、そのようなものとして、読み直してみよう。すなわち、男の歌は「風が吹くと、草も木も萎れてしまうものですが、見たところ草木はちゃんとあります。では、あなたの方はこの長い年月いかがでしたか。お元気でいらっしゃいましたか。」という、何年かぶりに訪れた女への御機嫌伺いの歌である。女の歌は、「桜が一方では、散って積もっていますが、歳月は私にばかり積もるように思われます。」という、盛りを過ぎようとする我が身を嘆く歌である。

このように、貫之が「草木」を衰えるものとして詠んだと考えれば、ありがちな贈答歌として、うまく解釈ができる。だが本当に、当時の人々にとって、この歌はスムーズに意味の読み取れる、あたり前の歌だったのだろうか。当時における「草木」の詠み方を、検討することによって確かめてみたい。

二　「草木」に対するイメージ

当時、「草木」とは秋冬には衰え、春夏には栄えるものである、というイメージが、かなり一般的であった。万葉集にも、

如是為乍（カクシツツ）　遊飲与（アソビノムトモ）　草木尚（クサキスラ）　春者生管（ハルハモエツツ）　秋者落去（アキハチリユク）
（万葉集巻六　一〇〇〇　坂上郎女）

と詠まれている程である。とりわけ、秋冬衰えるという詠み方は、和歌的好尚に一致したらしく、三代集時代の和歌四十九首のうち、二〇首がそうである。

秋冬衰えるものという認識は、実は漢詩文からきている。

悲哉秋之為レ気也　蕭瑟兮草木揺落而変衰
（文選　九辯五首　宋玉）

孟冬草木枯　烈火燎二山陂一　（白楽天詩集　寓意詩五首）

秋可レ哀兮哀二草木之揺落一　対二晩林於変衰一　兮聴二秋聲乎蕭索一
（経国集　重陽節神泉苑賦二秋可レ哀　太上天皇　在祚）

葵藿莫レ愁逢二燥気一　大陽有レ意煦レ寒栽
（田氏家集　賦二得草木黄落一）

のように、中国でも日本でも多くの例を見出すことができる。特に、第四例目では、詩題にまで定着している。さらにこの詩の内容を考えてみるに、「葵藿」とは、ひまわりや豆の葉などの下等な植物のことであり、ひいては臣下を指している。つまり島田忠臣は、「草木」を卑小な我が身の喩とし、太陽である帝の恩を受けることだ、と詠んでいるのである。そもそも「草木」は、季節に関わらず、

其徳優二天地一而和二陰陽一、節二四時一而調二五行一　〈中略〉
潤二於草木一、浸二於金石一、　（淮南子　原道訓）

斯誠皇恩廣被二草木一　聖化實二及豚魚一
（経国集　褒賦　藤宇合）

のように、恩徳を蒙る卑小な存在としても詠まれており、島田忠臣のような詠み方は、決して特殊ではない。

漢詩文の影響を受けた和歌世界でも、同様の詠み方がなされている。先に挙げた、古今集の文屋康秀歌のように、秋歌として詠まれたり、述懐歌や恋歌に用いられている。たとえば、次のような歌を挙げることができよう。

同〈延喜〉十六年秋述懐

くさもきもふけはかれぬるあきかせにさきのみまさるものおもひの花
（躬恒集Ⅳ　二七三）（注2）

心なき身は草木にもあらなくに秋くる風にうたがはるらむ
（後撰集雑四　一二七四　伊勢）（注3）

草も木も枯行く冬の宿なれば雪ならずしてとふ人ぞなき
（寛平御時后宮歌合　一三五）

秋来者　草木雖枯　吾屋門者　繁里増留　人芝不問禰者
アキクレハ　クサキカルレト　ワカヤトハ　シケリマサレル　ヒトシトハネハ
（新撰万葉集　三九六）

一首目は、不遇な躬恒自身の姿が、秋風に枯れゆく「草木」にオーバーラップしている。二首目は、「私は草木でもないはずなのに、秋（飽き）風を敏感に察知して心配しています。」と、恋人に捨てられそうな我が身を悲しむ歌である。三、四首目は、掛け言葉が盛んになり始めた時代を反映して、「枯る」と「離る」を掛けて、世間や恋人に見離された我が身の境遇を嘆く歌に仕立てている。

春夏栄えるものという認識も、やはり漢詩文に端を発し、

是故春風至、則甘雨降、生二育萬物一。羽者嫗伏、毛者孕育、草木栄華、鳥獣卵胎。（淮南子　原道訓）

江亭乗レ暁閑二衆芳一　春妍景麗草樹光（白楽天詩集　江亭翫レ春）

于時寒暖換レ節草樹迎レ春、蘭蕙抽レ心、随レ解レ凍而改レ色。（本朝文粋　早春内宴侍二清涼殿一同賦二草樹暗迎レ春應レ製　紀長谷雄）

とある。最後の紀長谷雄の例は内宴の詩序であり、「草樹」が帝の恵みを受ける臣下を暗示していることは、言うまでもない。和歌では、秋冬の「草木」ほどには、詠まれていないが、

恩比春光草木知

我が君も春のひかりにひとしくはくさ木なる身もしりぬべらなる　（千里集　一一五）

本

ふるさとのかすがののべのくさもきもはるにふたたびあふことしかな　（延喜二一年京極御息所歌合　三四　躬恒）

などを挙げることができる。一首目は、句題にあるとおり、恩を春光に比べた歌であり、二首目は、宇多法皇が京極御息所を伴って、春日神社に御幸した時の歓迎の歌である。この場合も、「草木」とは卑小な我が身であり、それが「春に逢えた」すなわち恩徳を蒙ったことの喜びを詠むことが主題である。

三　衰える「草木」の屏風歌再考

以上のように、「草木」が秋冬衰え春夏栄えるものであり、ひいては卑小な存在である人間の喩ともなるという詠み方は、漢詩文からはじまり、当時の和歌世界でもよくなされていたのである。

では、先程の屏風歌を振り返ってみよう。男の歌は、草木の健在ぶりと比較して、女の来し方を問うている。「草木」を人事に絡ませるという詠み方は、ごく当たり前である。しかし、衰えの象徴である「草木」を、御機嫌伺いであるはずの男の方が口にするのは、いささかまずいのではないだろうか。普通ならば、長年男に見離されてきた女の方が、我が身を謙遜して言うべき言葉である。

しかも、この屏風歌は、春の場面に詠まれている。女の歌の「さくら花かつちりながら」は、明らかに春を示している。また、貫之集から知られる屏風全体の並びからみても、春の帖であることは間違いない。普通ならば、春という季節には、栄える草木、ひいては恩徳を蒙る人間が詠まれてきたのだが、衰える草木としての詠み方を持ち出してきたのは、少々唐突と言えよう。

貫之は、以上の二点において、常識を破った詠み方をしていたのである。貫之をしてそのように詠ましめた起因は、何だったのだろうか。それはやはり、屏風の絵であろう。今日、平安

期の世俗画資料はほとんど残っておらず、どのような絵が描かれていたかは、推測するしかないのだが、草や木という背景としての景物は、さしたる変化なく随所に描かれていたと考えられる。貫之が目にした絵には、桜の咲くひなびた家が描かれ、その家の女主人と庭先に尋ねてきた男が描かれていたのであろう。その場面に桜を取り入れて詠むことは、どのような歌人でも思いつくことだが、貫之は加えて、桜のわきに描かれていたであろう草木という、何気ない景物に注目したのである。

貫之は、この小道具をうまく用いて、面白い歌を創りだした。観賞者は、この歌の押された場面を見る時、春にもかかわらず、しかも男の方から、衰えるものとしての「草木」を詠みかけられるとは、どのようなわびしい女かと、想像力を掻きたてられたに違いない。普通ならば、目を留められることのなかった「草木」というささやかな景物に留意したことが、このような歌を生み出したのである。

四　紅葉する「草木」の屏風歌

次の屏風歌も、秋冬「草木」が枯れるというイメージに基づいているのだが、やはり貫之独特の面白さが見受けられる。

紅葉する草木にも似ぬ竹のみぞかはらぬもののためしな

りけり　　（貫之集二七七　延喜十年屏風）
山の月

草木みな紅葉すれども照る月の山のははよにかはらざりけり　　（貫之集三四七　承平八年屏風）
九月くるる日

草も木も紅葉ちりぬとみるまでに秋の暮ぬるけふはきにけり　　（貫之集四八八　天慶四年屏風）

いづれも、季節は秋であり、紅葉する「草木」が詠まれている。一首目は、竹の不変性を讃える歌なのだが、その常緑を際立たせるために、対比物として「草木」が持ち出されてきている。竹と草木を対比させる発想は、もちろん古今集の、

題しらず
木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべらなり　　（古今集雑下　九五九　よみ人しらず）

という歌からきているのだが、貫之はさらに、「草木」の衰え変色するというイメージを付加して、竹と対比させている。二首目も、月の沈む山の端の不変性を述べんがために、「草木」が詠まれている。三首目は、九月尽日の感慨を詠んだものだが、季節の推移を示す象徴として、「草木」が詠まれている。

以上三首とも、「草木」は、変ずるもの推移するものとして詠まれている。その点では、従来どおりの認識であるところの、秋冬には衰えるものというイメージに基づいている。しかし、

貫之はそれを「紅葉」と表現した。普通、秋冬の草木は「萎る」「色変わる」「枯る」と表現され、色彩の乏しいうらぶれた様子を示していた。

「草木」が紅葉すると詠んでいる例は、貫之以外に見当らない。ごく似た例としては、素性の、

いつみの大将の四十賀に、人〳〵歌よみしかは

ゆふくれはにほふくさきのなけれはやちるとみえしにもみちとまれる　（素性集　五五）

という歌がある。延喜五年二月藤原定国四十賀に、詠んだものである（注4）。第五句の「もみち」が、賀宴の行なわれた二月という時期に合わないので、屏風の絵にあわせて詠まれたと考えられる。詞書から見て、屏風に押された歌、すなわち屏風歌ではないだろう。座興で、その場かぎり楽しむために詠まれた、屏風絵歌と考えられる。解釈してみると、「庭を見ても、夕暮には暗くて、照り映える草木は何もない。それなのにどうだ。絵の中の紅葉は散りそうになりながら、留まってくれているではないか。私達を楽しませるために。」となるだろう。絵の紅葉が静止したままであることを利用した、機知にあふれた歌であり、その場のめでたさを盛り上げたことだろう。

貫之は、屏風歌を奉ることで、この賀に関わっており、素性の屏風絵歌を耳にする機会もあったであろう。素性歌では、「草木」が紅葉する、とまでは詠まれていないが、「紅葉」に類似するものとして持ち出されている点、貫之のヒントになったかもしれない。しかし、直接的な原因は、やはり貫之が絵に忠実であったことに求められるのではないだろうか。現在残る絵画資料から推定して、秋の帖には随所に赤や黄で彩られた植物が、秋を示す物として描かれていたと思われる。貫之は「草木」が枯れ衰えるものであるというイメージを用いて詠もうとしながら、絵に忠実に「紅葉」と表現したのである。その結果、貫之の屏風歌は、華やかな印象を読む人に与え、草木の紅葉が描かれている、秋帖の絵の美しさを盛り立てる役目を果たしているのである。

五　雪と「草木」の屏風歌

次に、雪とともに詠まれた「草木」を取り上げたい。雪と「草木」との取り合わせは、あまり見当らないのだが、貫之屏風歌には六首もある。その中、四首までが、草木に降りかかった雪を花に見立てる歌である。

雪のふれる

春くれば草木に花の咲くほどはふりくる雪の心なりけり　（貫之集一三八　延喜十九年屏風）

人の家に女すだれのもとに立ち出でて雪の木にふりかかれるを見れる

草木にも花咲きにけりふる雪や春たつさきに花と成るらん　（貫之集三七二　承平七年屏風）

元日雪ふれり

けふしまれ雪のふれれば草も木も春てふなべに花ぞ咲ける　（貫之集四六七　天慶四年屏風）

初雪

雪ふれば草木になべてをる人の衣手さむき花ぞさきける　（貫之集四九五　天慶五年屏風）

草木の雪を何かに見立てることは、むろん漢詩文にあり、

散絮因レ風起　凝鹽任レ気来　樓皆白玉　草樹總花梅　（経国集　詠レ雪　枝永野）

では、草木に降りかかった雪を梅の花と見ており、

此朝誰不二雪山僧一　恩捨綿綿草木凝　（菅家文草　感二雪朝一　勅使施二老僧綿襖一）

では、下賜される綿と見立てている。和歌では、貫之に先行するものとして、

トシツキノ　ユキフリユケハ　クサキモキ　オイコソスクシ　シロクミユレハ

年月之　雪降往者　草裳木裳　老許曾為良芝　白見礼者　（新撰万葉集冬　四三八）

という歌がある。「雪降る」に「行き古る」を掛け、草木の雪を白髪に見立てた、機知にあふれた歌である。また、草木に降りかかる雪と限定しなければ、雪を花に見立てる歌が数多く詠まれていたことは、周知の事実である。

このような状況にあっては、貫之が先のような屏風歌を詠んだことは、当然の成り行きかもしれない。しかし、四首の屏風歌を見比べてみると、破線部「春くれば」「雪ふれば」や、傍線部「草木に（草も木も）花咲く」という表現が、あまりにも似通っていることが気になる。実は、これより以前古今集に、

冬のうたとて

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞさきける　（古今集冬　三二三　紀貫之）

という歌がある。四首の屏風歌の破線部・傍線部は、この旧作の表現に拠っていたことがわかる。なお、同じく古今集に、

ゆきのふりけるを見てよめる

雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきてをらまし　（古今集冬　三三七　紀友則）

という歌があり、「木」に降り積もる雪を詠んでいる点は、貫之と異なるが、よく似た表現の歌である。しかし、貫之が屏風歌を詠む際に参考にしたのは、やはり自作の方だっただろう。というのは、貫之はこの他にも、雪を花に、花を雪に見立てる歌を多く詠んでいるのだが、破線部・傍線部のような類型表現を用いるのは、「草木」に降り積もる雪を詠む時に限ってだからである。

このような、一度用いた表現・趣向を繰返し用いるという傾向は、貫之屏風歌全般にかなり見受けられ、意欲の減退を示す

証拠と見做されている。今の場合も、その一例と言えよう。しかし、逆に言えば、貫之が古今集歌の出来に自信があり、繰り返しその表現を用いてみたくなったとも考えられよう。その自負が、屏風の絵を目にした時、他の歌人は注目しなかった草木という、ささいな景物に留意させたのかもしれない。

雪中の草木に目を向けた貫之は、雪を花に見立てるというパターン化した詠み方を越えて、次のようにも詠んでいる。

雪ふればうときものなく草も木もひとつゆかりに成りぬべらなり（貫之集三一三　延喜末年より延長七年屏風）

元日雪のふれる所

白妙に雪のふれれば草も木も年と共にも新しきかな

（貫之集五一九　天慶五年屏風）

一首目は、「一面に雪が降ると、疎遠なものなく、草も木も同じ縁につながるものとなったようだ。」と解釈できようが、「ひとつゆかり」という表現が面白い。用例のあまりない言葉だが、たとえば源氏物語では、

［薫は］何事につけても、たゞ、かの、一つゆかりをぞ、思ひ出で給ひける　（蜻蛉）

と、八宮一族を指す言葉となっている。人間に用いる言葉を草木に用いて、擬人的に表現しているのだが、この背後には、

めのおとうとをもて侍りける人にうへのきぬをおくるとてよみてやりける

紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

（古今集雑上　八六八　在原業平　伊勢物語四十一段）

という、妻の妹の夫を「草木」とたとえ、別け隔てすまいと詠んだ業平歌の影響を、考えてよいかもしれない。しかし、一面に降り積もった雪を言い表わすのに、その下にちらほら見え隠れする草木に注目して、雪を頭に頂いているおかげで、草も木も同じ一族のように見えると、ユーモアたっぷりに表現したのは、貫之の手柄と言えよう。

二首目も、一面の雪を詠んでいる。「真っ白に雪が降っているので、草木も新年とともに新しくなる。」と解釈できよう。実はこの歌は、先に挙げた、草木に雪の花咲くという屏風歌の三首目、

元日雪ふれり

けふしまれ雪のふれれば草も木も春てふなべに花ぞ咲ける

（貫之集四六七　天慶四年屏風）

と、二句目三句目が同じである。偶然の一致とも考えられるが、詞書によれば、どちらも詠もうとした題材が、「元日雪のふれる所」「元日雪ふれり」と同じである。また、この二首は天慶四年五年と、連続した年に詠作されている。天慶五年に元日の雪を詠もうとして、去年の詠作をつまびらいたとみてよいだろう。旧作をヒントに、画中の草木に狙いを定めた貫之は、今度はいつもの、雪を花に見立てるという趣向を使わなかった。真

っ白になった草木は、新年とともに新生すると、詠んだのである。この趣向は、管見では他に見出すことのできない、斬新なものである。

おわりに

「草木」は、屏風歌としては主題となることのない、つい見過ごされてしまいがちな、ささいな景物である。貫之がそれに目を留めたことについては、様々な契機が考えられよう。素性を始めとする先人の歌からの影響、自作歌の成功への自信などである。

だが、貫之自身の絵に対峙する時の姿勢が、もっとも大きな原因ではなかっただろうか。貫之は、鋭い観察力によって、桜の咲く宿に生えている草木、紅葉する草木、雪を被る草木に着目し、歌に取り入れている。その結果は、男女の贈答歌をありきたり以上のものにし、華やかな秋の光景を際立たせ、また、ユーモアあふれる雪の歌を生み出すこととなった。

貫之の屏風歌が、つい類型にはまりがちであったことは、確かである。そこには、決った題材で、大量生産しなければならなかったというような事情があったであろう。そのような時、絵に忠実に詠むということが、単調さを破るための、一つの活路となっていたのではないだろうか。

注

(1)「貫之の慶賀表現ー「ももとせ」をめぐってー」『中古文学』平成三年五月刊行予定

(2)躬恒集では、第二句「したうへはかれゆく」となっているが、貫之集八二三に同歌が収載されており、それによって訂正した。

(3)後撰集二八六に重出。贈答歌が異なるので、二八六番では伊勢が身の潔白を申し立てる歌となっているが、「草木」の詠み方は変わらない。なお、諸本により「草木」を「草葉」とする異同がある。

(4)「いつみの大将」とは、右大将藤原定国のこと。その四十賀は、延喜五年二月に行なわれた。その時の屏風歌の全容は徳原茂実氏の研究により、ほぼ判明している。(徳原茂実氏「右大将定国四十の賀をめぐって」『平安文学研究』昭和五十三年十一月)

徳原氏はこの素性歌について、「一つには詞書に屏風歌であるとはされてないこと、二つには歌自体が賀の屏風歌としてふさわしくないこと」から、屏風歌ではないとされている。論者も、詞書から判断して、屏風歌ではないと考える。しかし、慶賀性がないという点については、見解を異にする。

(たじま・ともこ　本学研究生)